

白鳥処女説話の位置と分析

大久間喜一郎

一 白鳥処女説話とその説話的位置

私は曾て、白鳥処女説話の代表的な一例として、バートン版「一夜物語」に見えるパッソラーのハッサンの話について書いたことがある。^(註)そして、ニュー・ギニアのマリンド・アニメ族の伝承やキワイ島のパプア人の伝承が白鳥処女説話の原型を保存しているものであると推定し、記紀に見える豊玉姫の説話やシベリアのモルドウィン人の間に伝えられている「水の神の娘」の話は、白鳥処女説話とは同系列に置くべき説話ではあっても、異類婚説話への傾斜を示しているという見解を付け加えたことがあった。

白鳥処女説話というものも、他の説話がそうであるように、伝承によってそれぞれ部分的に差異があつて、これが白鳥処女の本筋の話だということは一口に決めてしまえないのであるが、類似の説話と比較することにより、あるいは婚姻譚としての性格を検討することによって、大体次のように話の筋を決めることができるかと思う。

何羽かの白鳥が天界からやってきて水辺に降りる。そして羽の衣を脱ぐと美しい処女になつて、彼女たちは水浴をする。ところが一

部始終を覗き見ている男があつて、処女たちに気付かれないように自分の心惹かれる処女の羽衣を隠してしまう。やがて、処女たちは水浴を終えて羽の衣を身につけると白鳥になつて、一人の処女だけを残して天界へ去つてゆく。隠れて見ていた男は姿を現わし、処女を促して連れ帰り自分の妻にする。そして何年かが経つて二人の間には何人かの子供が生まれる。ところが、ある偶然のことから妻は羽の衣の隠し場所を知る。彼女は羽の衣を身につけると白鳥となつて子供たちを連れて天界へ飛び去る。

以上が白鳥処女説話の根本の筋であるが、この後に妻の後を追う良人の話が付けられていることがある。前述の一夜物語のパッソラーのハッサンの話もそうである。だがこの部分はいくまでも追加部分であつて、本来の話にはなかつたものだと私は思つている。それについては後で述べるつもりである。

この白鳥処女説話が婚姻説話の一類であることは明らかである。今、そうした観点から眺める時、主人公が白鳥でなければならぬといつた制限さえ緩めれば類似の説話は幾つも出てくる。そこで白鳥処女説話のモチーフとなつている話の筋を次の二点に要約してみよう。

- 一、人間の女に変身した動物と人間の男が結婚すること。
- 二、暫らく結婚生活を送ってから、突然妻が故国に去ってゆくこと。

この要約の仕方は、勿論類似の説話を考慮に入れての上である。

ここでは主人公を白鳥とは限らず、従って主人公に付随する羽衣といった特殊な要素を外してしまうのである。その上で、こうした婚姻話の類型を拾ってみると、容易に目に触れるものだけでも相当にある。

先ず、日本の民話の世界でも、天人女房・七夕女房・鶴女房・雉女房・鳥女房・蛤女房・蛇女房などがあり、古く遡れば、古風土記逸文に見える三つの話、即ち近江国風土記の「伊香の小江」の話、丹後国風土記の「奈具社縁起」の話、駿河国風土記の「三保の松原」の話などがある。また、記紀の豊玉姫伝説、日本霊異記の「狐を妻となして子を生ましむる縁」なども同じ類型であり、東海道名所記に載せられた三保の松原の「羽衣の松」の伝説は、風土記逸文のそれよりも却って古形を保っているかのようにみえる。次いで、文芸作品の中でこの説話の要素を求めれば、先ず竹取物語が挙げられる。海道記に見える「採竹翁と鶯姫」の話は、竹取の筋に鶯姫の伝承を混入させてしまったものらしい。また、謡曲「羽衣」、それから奈良絵本「鶴の草紙」・御伽草子「蛤の草紙」なども挙げることができる。

次に日本を離れるとどの位あるのか見当もつかないが、Dicinary of Folklore, Mythology and Legend. に既に掲げられているシヤタパタ・プラーフマナあたりから始まって相当の数に上るだらうということは想像できる。そこで、手近かにあって目にとまったもの

のを挙げてみると、志田義秀氏が紹介している高橋亭氏「朝鮮の物語集」の中の「仙女の羽衣」、柳田国男氏が紹介する孫普泰氏「朝鮮民譚集」の中の羽衣説話、高木敏雄氏が「日本神話伝説の研究」の中で引用している「元中記」の羽衣説話、また松岡静雄氏の紹介するバンクス群島の主神クアットに関する婚姻譚としての羽衣説話などがある。また、文芸作品ではあるが聊齋志異には「竹青」「阿英」などがある。アイヌ人には「アイヌラックルの求婚譚」の中に羽衣説話を含む話があり（註を）、シベリアのモルドウイン人の間には、水の神の娘の一人が村の青年に促えられて、結婚し子供を沢山産んだが、彼女は働きたがらないので皆に罵られ、子供を残して水の中に帰ってしまうという話がある。（註）また、エスキモーに伝わる鶯鳥の娘との婚姻譚では最後に羽根の着物を二人の子供たちにも着せて良人の許を去ってゆくという典型的な白鳥処女型の説話である。さらにアラスカのエスキモーには家鴨の娘との婚姻譚が伝えられている。この方は去った妻と子供の後を追って良人は家鴨の国へやって来るが、妻は良人のことを覚えていない。以上の二つの説話はレヴィ・ブリュルの「原始神話学」に引用されている話であるが、同書はさらに、南アメリカのアレクナ族に伝わる「大禿鷹の娘の話」や、ニュー・ギニアの「鰐の娘の話」、キワイ島で語られた「二匹の牝豚と結婚した二人の兄弟の話」などを引いている。そしてこれらの話には、大禿鷹の羽根の着物や豚が人間に変身するときの人間の皮膚とかが出てくる。「大禿鷹の娘の話」は天人女房の話に類似し、「鰐の娘の話」は、その素姓について卑められた妻が子供たちをつれて水の中の故国へ帰ってゆく。良人はその後を追うが

発見できない。「牝豚と結婚した兄弟の話」はキワイ島の始祖神話ともいふべき話である。

こうした婚姻譚の類型と極めて類似しているながら、男と女の立場が逆であったり、男が異郷である女の故国を訪門することに重点が置かれていたりする話がある。わが国の昔話「竜宮女房」の話がそれであり、記紀の豊玉姫説話の前段に当る日子穗々出見命の海宮訪問の説話、丹後国風土記逸文の「水江の浦島子と亀比売の話」がそれである。また松岡静雄氏の記録しているサモアの伝説でテヴァ族の始祖を説く話もそれである。言い落としたが、琉球の劇「銘苅子」は能の「羽衣」の影響によってできたものであるが、銘苅子が天女と夫婦になるといふ筋は白鳥処女の説話に忠実であったと言ふべきである。

以上の諸説話を婚姻説話の一類型として眺めたときに、さらにそれぞれの説話のもつ特色によってこれを三つの型に分けることが可能であると思われる。それは次の細かい類型に分類することである。即ち、白鳥処女型、信田妻型、鳥女房型の三つの説話類型である。

二 類型の分析

白鳥処女型説話から若し羽衣の要素を取り除いてしまつたらどうであろうか。恐らく信田妻型説話、鳥女房型説話と区別し得る要素の一つを失ってしまうことだろう。白鳥処女説話の姿を正しく見るためには、その構成要素についての正確な分析を必要とするに違いない。そうした目的から白鳥処女型説話は次の諸要素に分けて考え

ることは妥当であろう。

(一) 水浴のために天界から降つた白鳥の群は羽衣を脱ぐとそれぞれ処女になる。

(二) 処女の水浴を垣間見る男があつて、その中の一人の羽衣を隠す。

(三) 天界に帰れなくなった処女の一人は、羽衣を隠した男の妻となる。

(四) 処女は人界で何人かの子供を生むが、偶然のことから昔の羽衣を発見し、子供を伴つて天界に帰る。

(五) 去つた妻の後を追つて良人は妻に再会する。V

さて、(一)の場合、白鳥は群れをなして天界から降るのが普通である。風土記の「奈具社縁起」や「伊香の小江」の場合も、共に「天の八処女」が白鳥となつて天から降つたと説明している。これが、只一人だけ降つてくるのはアイヌラックルの神婚譚とか、喜界島昔話の天人女房譚の一部などにみることが出来る。だが、これらは恐らく、白鳥が群れてやってくるという形式が本当であろう。喜界島の天人女房は岩倉市郎氏によって三通り採集されているが、その一つは姉妹で天降つて水浴するという事になっている。その他、阿波祖谷山の「七夕女房」でも、讃岐志々島の「七夕さんの話」でも、水浴のために天から降りてくる白鳥は複数である。

(二)では、垣間見る男は若者とは限らない。「奈具社縁起」では老翁であるし、奄美大島の天人女房譚や信州上伊那郡小野村の天人女房譚もそれである。「奈具社縁起」では処女は老夫婦の養女となるのであるが、その話に合わせるために、羽衣を盗んだ者を老人と定

めたのではなくて、もともと老人と天女との結婚ということがあったらしいので、それがこの場合は義父と養女との関係に変わったものだろう。竹取翁も偶然に登場したのではなさそうである。

(三)この場合は前述のように、処女が羽衣を隠した老夫婦の養女となるという話もあるわけだが、これは恐らく本筋の話ではあるまい。謡曲「羽衣」の場合は、天女の舞を見るだけで満足するわけだが、これも駿河国風土記逸文の「三保の松原」の伝説によれば、漁夫は神女と結婚し、その後、女は羽衣を得て去ってゆき、漁人も登仙したと伝えている。但し、東海道名所記には漁人登仙の伝承は記されていない。尤も登仙と言っても、妻の後を追ったという伝えを中国風に飾ったのかも知れないのである。

(四)では、子供は大方二人以上生まれるようである。一人しか生まれないのは、これも大方、その子が神の子として人間界で記憶されるような存在であって、一種の始祖伝説の俤を伝える場合に限るようである。近江風土記逸文「伊香の小江」の場合には四人の子供が生まれ、伊香連の祖となっている。そして、結末に始祖伝説が置かれてあるこのような場合は、母親が再び天界へ去るときは子供を伴っては行かない。子供は父親と共に人界に残って部族の始祖となるのである。

(五)故国へ去った妻の後を良人が追ってゆくという形式は、天人女房の昔話では、これが有るものと無いものがある。また、七夕の起原を説く昔話は、しばしば天人女房型説話と結合しているものだが、その場合には必ず天界に去った妻の後を良人が追うことになる。尤もそうでなければ七夕説話は成立しなくなるわけである。バ

ートン版「千一夜物語」のパスソラーのハッサンの話によれば、難の果てに妻の故国（魔神の国）に到着した良人は、姉の女王から迫害されている妻と子供たちを救い出して遙々郷里に帰るということになっていて、去った妻の後を追って妻を取り戻すのが一つの形式になっているとも考えられる。神田秀夫氏は、これを白鳥処女説話における必要な要素と考えて居られるけれども（註4）、それはどうであろうか。この点は後で述べたいと思う。

次に、信田妻型説話と鳥女房型説話について述べることにしよう。これらは白鳥処女説話とほぼ同型の展開過程を有しながら、やはり白鳥処女説話とは言い得ないものである。その大きな特色は、羽衣とか飛羽とかいうものを介在させない点である。そして、鶴とか狐とか蛇・鱉・蛤とかが人間の女性に化して男と結婚する。結婚の動機は、報恩のためとか、男が不当に不遇であるとか、あるいは偶然とか、いろいろあるらしい。そして結婚後子供が生まれてから女の素姓が露れる。場合によると、予め男が女の出身を知っていて秘密にしていたのに、ついそのタブーを犯し口外する。女は大きな恥辱を受けたことになり、子供がある場合には、子供を残して良人の許を去り、女の故国に帰ってゆくという話である。

男が妻の素姓を知ったり、あるいは妻の素姓を口に出して罵ったりすることは、白鳥処女型説話において妻が結婚後、隠されてあった羽衣を見付け出すモチーフに該当する。羽衣をみつげ出すことは、やはり自己の出自に関する再認識の契機になるのである。そう考えれば、これらの説話も白鳥処女型説話と極めて近い関係にあると言える。

信田妻型説話は白鳥処女説話と極めて類似しているもので、動物が人間の女に変身したり、女が動物に再び帰るのに羽衣に当るものは必ずしも必要ではなく、必要があっても決して羽衣ではない。キワイ島に伝わる「牝豚と結婚した若者の話」の場合は、牝豚はその皮を脱ぎ人間の皮膚を身につけて女となる。靈異記の場合では、狐が女に変身するのに何等特別なものを必要としてははいないし、犬に吠えつかれて狐の姿となるのも、恐怖の故に本性をあらわしたということになっている。

信田妻型のもう一つの特色は、必ず子供が生まれるということである。その数は一定していないが、母親が本来の姿となって故国に帰る際は、子供を伴ってゆかない。子供は人間の国に残り、部族の始祖とか、特殊な能力を備えた人間となる。テヴァ族の祖先を語るサモアの伝説や神武天皇の父君鸕草葺不合命の出生を語る豊玉姫説話、あるいは前記靈異記の話では、子供が三野の狐の直の祖となったことを記しているのである。風土記「伊香の小江」の場合は、白鳥処女型と信田妻型の結合を示したものと判断される。阿波祖谷山にある蛇女房の話では、子供は京の三間堂の本尊となったと伝える。昔話にまでそうした伝説的要素を残したのは、始祖伝説の崩れたものであるからだろうが、この要素をもって信田妻型の大きな特色と考えたい。

もう一方の鳥女房型説話には、鳥女房・雉女房・鶴女房・蛤女房などがあり、文芸作品めいたものになると、奈良絵本「鶴の草紙」とか聊齋志異の「阿英」とかがこれに属する。いずれも共通した特色は、命を救われた報恩のために人間の妻となって、その間に報恩

行為をするが、素姓を知られて立ち去ってゆくことになる。その際には子供は生まれない。良人たる人間も妻の後を追わないのが原則のようである。だが、稀には甌島の鶴女房のように、良人が妻の後を追って妻の故国に行くが、すぐに帰されてしまう。

以上述べてきた三つの説話類型を比較すると、白鳥処女型と信田妻型の場合では、子供が生まれるという共通点があり、信田妻型と鳥女房型の場合には、素姓を知られることによって妻が良人の許を去るという共通点がある。また、白鳥処女と鳥女房との間には、鳥女房型の大部分は鳥が女に変身するわけであるが、それを除いては共通点は無さそうである。それよりもこの二つの説話の大きな差異は、白鳥処女では羽衣を盗むという手段によって無理に妻にするという、横暴とも見える古代的な素朴な策略が行われるのに対して、鳥女房の場合には報恩のための自発的行為として妻になるのである。この報恩行為というものを美德とした社会は、決して真の古代社会ではない。そこには個人の存在意義が認められ、社会内部における個人の立場を相互に認めあうようになった段階において、受けた恩を返すということが社会人の責任とも義務ともなってくるわけであるから、報恩を基調とした鳥女房型説話の起原は案外古くはないのだろうと思われる。そして、白鳥処女も信田妻もその基調となっている世界観はトーテムズムのそれである。人間と動物とを区別しない世界観である。(註5)

三 白鳥処女説話の問題点

この稿の終りに当たって、白鳥処女の話でもう少し核心に触れる

ような二三の問題を取りあげて私見を述べてみたい。まず、白鳥処女の良人の立場を考えてみたい。

白鳥処女の良人が妻に去られた後、妻の故国へ辿り着き、妻と子供を再び手に入れてめでたく帰郷するのは千一夜物語の話である。前述した話であるが、エスキモーの「家鴨の妻」の場合はどうであろう。家鴨の国を尋ねた良人はそこで妻子に逢うが、もう良人や父を識別することはできないのである。妻の故国は良人にとっては他界なのである。動物と人間とを区別しなかったトーテムズムの世界にあっても、心までが通い合うのは特別な条件が必要であった。

兎に角、婚姻説話において妻を得た動機というのは、豊玉姫説話にしても、天人女房にしても、浦島説話にしても、他界から妻の方でこの国へ来たか（これは呪力に恵まれた女の立場を認めているのである）、何らかの助けを得て男の方で他界へ行つたかがきつかけである。妻となった女性はいずれもこの国と他界との間を自由に交通しうる能力があるが、良人である人間の方にはそうした呪力に恵まれていないのが普通である。日子穂々出見命は「間なし勝間の小舟」の力で海神の宮へ行き、丹後風土記の浦島も亀比売の力で常世の島へ行く。しかしそうした呪力は偶然に他から与えられたもので、本来的に具有していたものではない。したがって良人が妻の後を追わないのが根元の形だと私は考える。殊に白鳥処女の場合、白鳥の故国は天界であったと考えられる。なおさらの事である。

また鳥の羽の着脱で鳥になったり人間になったりするものがこの説話の原型と考えられるにせよ、白鳥処女の羽衣は単なる飛行道具であると割り切つて、故国においても人間であったと考えるのは余り

にも合理精神に委ねすぎている。レヴィ・ブリュルが記るところのキワイ島の豚にしても、靈異記の狐妻にしてもそうであるが、この国における常住の形と故国における常住の形とは違うのである。靈異記の場合では子まで儲けながら去つてゆく妻を留めかねて、「たまには来て寝てほしい」と良人に言わせている。千一夜物語のハッサンのように艱難辛苦しくとも妻は近くの森の中にいるのである。しかし夫婦の間を隔てているものがある。それは人間と異類との壁である。それだからこそ、この国で本体を現わした豊玉姫も鶴女房も「我に恥見せつ」というわけで去つてゆくのである。白鳥処女だけに限つてそうでないとは言えないのである。天人女房の要素をもつ「蛤の草紙」の中でも、『何と思うとも重ねて逢ふべきことならねば』とあるのが二つの世界の壁を意味している言葉である。

この二つの異つた世界の間横たわる障害を克服し得るのは特殊な人間に限られていた。何の通力もたぬ平凡な一個の人間が、呪力ある妻を手に入れた話が白鳥処女の説話である。去つた妻を取り戻すためにどのような手段が講ぜられようか。まして類を異にする生物である。白鳥処女の本体が神聖な女性らしく描かれているのは、この説話が最初に展開する舞台となつている国においての場合であつて、説話以前の白鳥の本体までは、この説話を伝えた人々の誰もが考へてはいなかつたと思われる。だから去つた妻の後を追つて良人が妻を尋ねた結果、妻が本當の鳥であつたらどうするか。したがつてそこまでは考へなかつたのである。

次の問題としては、白鳥の処女は子供まで儲けながら何故故郷へ

帰りがたがるのかということである。この点に關する想像は比較的容易である。その一つは、古代の婚姻形態から考へて、妻が良人の家において養われているのは不自然だということである。妻には妻の生活と財産とが故國に存在する筈である。一種の略奪婚の結果になっているところから、女は自分自身の生活の場をもたない奴隸妻的存在になつてゐるので、あくまで自分の家へ歸る希望を捨てないのである。

七夕女房譚のいくつかを見て分るように、天界に去つた妻を追つて昇天した男は、天界で妻の農耕生活の手助けなどして日を送る。このような女は故國において別の生活基盤をもつてゐるのである。第二の観点としては、白鳥処女は結婚生活の中で、しばしば人間界に財物をもたらず役割を与へられている。「奈具社縁起」がさうであるし、鳥女房型説話ではそれがはっきりしている。妻となつた女が神聖な存在であつたり、特別な能力に恵まれていたりするためという表面からの見方と同時に、逆に考えれば財物を生産すべきことが強制されている奴隸妻であつた。これが恩愛を振り切つて故國へ歸る眞の理由であると思われ。

また、白鳥処女は羽衣を身につけると何らのためらいもなく天界へ飛び去る。良人は勿論のこと、子供も忘れて故國へ飛び歸る場合もある。この事について竹取物語が一つの暗示を与えてくれる。かぐや姫を迎へて来た天人の一人が姫に天の羽衣を着せようとする時、姫は『衣着せつる人は心異になるなり』と言つて暫し押しどめめる。また羽衣石山伝説によれば、この國に安住した天人が二人の姿をつれて倉吉の神阪へ行き、娘たちに羽衣を着せて舞わせ、次に

自分が試みにその羽衣を着ると、忽ち人界の心を失つて天へ歸つてゆく氣になつたと伝える話がある。私はこの二つの話から、羽衣を着て人間界の恩愛を忘れるところで思い切りよく天へ歸ることができたのだと長いこと想像してゐた。しかし、今はこの考えを改めたと思つてゐる。つまり、この説明はむしろ蛇足なのである。つまり後世になつての賢しらから付会された説明なのである。羽衣を着るといふことは、異類に変化することである。心は既に人間と通ひ合はなくなつた筈である。こうしたことは説明を待たずとも古代人の心には既に判つてゐたことなのである。

なお、最後に付け加えておきたいことは、白鳥処女の母親が羽衣を見つけて子供をつれて天界に飛び歸るといふ伝へには、最古代の母系制社会の慣習という面から考へてみる必要があるのではないかとこのことである。そうした社会では女の子供は母親に所属するという原則である。この点からこの説話はもう一度見直して見る必要があるやうな氣がする。

- 註1 昭和三十五年一月発行、明治大学人文科学研究所
紀要第十四号所収「日本文学における古代的なもの」
註2 金田一京助著「アイヌの神典」
註3 前記「日本文学における古代的なもの」にも紹介して置いたが、出典は「シベリア諸民族のシャーマン教」(ニオラツェ著、牧野弘一訳)。
註4 神田秀夫「羽衣説話」(文学・語学第三十号)
註5 前掲「日本文学における古代的なもの」および、昭和三十六年十月発行、日本文学論究第二十册所収の拙稿「古代変身譚と婚姻説話」参照。